

プロローグ

いつ終わるともしれない行動制限の中、隔離と死の影がひたひたと足元に迫ってくるようなパンデミックの危機。その闇の奥にようやく薄明が見え始めたころ、ウクライナからは戦車の響きと虐げられた人々の嘆きが届くようになった。この日本で繰り返される災害によって、すでにささくれ立っていた心に、無数の不安の棘とげが突き刺さる。そうした中で、セキュリティへの強い欲求が社会を覆い始めた。

セキュリティとは不安がないことを意味する。セキュリティの危機は、安定的な秩序への渴望を生む。多元性や自由は不安定につながると避けられ、一元性や強権が求められるようになる。権威主義体制のみならず、これまで自由を重視すると標榜ひょうぼうしてきた社会さえ、変質の兆しを見せ始める。軍事的なものへの動員が進み、国策に反するとされるものは排除される。自由の領域が侵食されていく。自分たちの社会がこれからどの方向に向かうのか、それ自体が不安要因となり始めたのである。

二〇二二年春ごろ、そのような状況の中で筆者が選んだのは、自由とセキュリティとの

関係を深く考えた何人かの思想家たちの仕事に立ち戻ることであった。それぞれの思想家を取り巻く状況は異なり、議論の文脈も異なっていたとしても、そこには何らかの共通の関心があるのではないか。そして、それは、今を生きる我々にとっても、無関係ではないはずだ、と思われたからである。

本書は、集英社新書編集長の落合勝人氏を「聞き役」として、各回一冊の書物について筆者が語り、その書き起こしを基に全面的に書き直す形で成立した。思想史家でもある同氏の鋭い問いかけなしには本書はあり得なかつた。編集実務は編集部の井上梨乃氏にご担当いただき、同氏の着実なお仕事に大いに助けられた。

構成は必ずしも書物の年代順ではなく、語りの順番に基づいている。しかし、それはラダムではなく、自由を強調する政治理論とセキュリティを強調する政治理論をほぼ交互に取り上げることによって、思想家らの「対話」を再構成しようとしたものである。この試みは一定の成功を収め、時空を超えた対位法による一種の変奏曲集のようなものが、現れてきたように思う。

第一章では、最も典型的な自由論として、社会の「多数者の専制」に抗して、個人の選択を擁護する一九世紀のJ・S・ミルを読んだ。

第二章と第三章では一挙に時代を遡り、一七一―一八世紀のホッブズとルソーが、セキユリティを確保する観点から、社会を構成する論理をどのように紡いだかを見た。

第四章では、二〇世紀に入り、自由の概念的な整理を行い、自らも多元主義と自由を強く擁護したバーリンを読んだ。

第五章で登場するのは、ホッブズを「継承」しつつ、戦争と内戦の時代にセキユリティ確保を構想したシュミットである。

そして第六章では、既存秩序への対抗の契機を歴史の中に発掘しようとする、フーコーの議論を論じた。

二〇二三年秋には、ウクライナの事態が収束しない中、パレスチナで新たな戦争が始まった。病院までもが攻撃を受け、罪のない子どもたちが命を落とす状況が、目に焼きついて離れない。そして、二〇二四年が明けるや否や、日本はまた大きな災害に見舞われることとなった。不安はいよいよ高まり、権力の一元化への衝動は強まり続けている。しかし、そうであるからこそ、既存の秩序とは別の可能性を考える自由の価値もいや増しているのではないだろうか。

本書で取り上げた思想家たちについては、それぞれ膨大な研究蓄積があるが、筆者はい

ずれについても専門とはしていない。本書は右に記したような問題意識に基づいて、筆者
なりの読みを試みたものにすぎない。セキュリティ志向が強まる時代における自由の行方
について、危機意識を共有する読者に本書が届くとすれば、それに勝る喜びはない。